

高橋家御用留の真忠組騒動

No.388

真忠組とは、幕末に九十九里浜片貝地方で蜂起した攘夷派の結社です。茂原市内立木の高橋家の『御用留』には、この騒動への対応が書かれています。浪人が指導する貧民たちが、文久三年（一八六三）末から九十九里一帯で（北は八日市場から南は茂原まで）武器、資金を強制的に富裕農民、網主、商人から徴収する中で「世直し」的要素を一部持ったと言われます。同年二月四日、上総國小関新田の大村屋旅館を接収して「真忠組義士旅館」という大きな表札を掲げて本拠を置きました。組員八七人で武士は、楠音次郎・三浦帯刀ら数人に過ぎず、ほとんどが無宿者や下層民出身者で構成されました。そして茂原東光院には分隊が置かれました。当初は、水戸天狗党の影響を受けた攘夷運動として開始されましたが、当時の他の尊攘グループのように名家や公卿の支援を受けることはなく、九十九里地方の豪商や豪農、網元から「強請」してその金を貧困にあえぐ農民、漁民に分配しました。そのように、次第に貧民救済の義民的運動の色彩を強め、「世直し」を掲げるようになりました。しかし、真忠組に強請された商人たちは江戸勘定奉行や各地の領主に被害届を提出し、元治元年（一八六四）一月十七日、幕府が差し向けた福島藩、一宮藩、多古藩、佐倉藩らが藩兵を動員して真忠組の三拠点を攻撃。その結果真忠組は、一日で壊滅してしまいました。

大村屋では東金周辺に領地を持つ福島藩兵を中心に、関東取締出役配下とともに、大砲、小銃で攻撃され楠音次郎以下七名が自刃・討死しましたが大半の組員は逃亡したとされます。大村屋襲撃の報を受け藻原寺東光院在の三浦帯刀他は小関新田へ向かいましたが、途中剃金村（白子町）で一宮藩兵に迎撃され捕縛されました。

立木村に真忠組の使いが来たのは一月二〇日のことで

した。真忠組は、

我等共今般異国討払可申志願
二候得共無録之浪人武具用意
金に指支候間、当村喜惣治方
二而致借用度、依而楠音次郎、
三浦帯刀より喜惣治方江金貳
百両借用申込

と、首謀者楠音次郎・三浦帯刀の名で、自分たちは異国を打ち払うために決起したが、浪人なので武具を取りそろえることができず二百両を借用したいというものです。二百両もの大金なので、立木村では相談の結果、とりあえず百両を二月二五日に、あと百両は、翌年の一月一日に支払うとの書付を送りました。その一方領主鶴牧藩にくわしく事情を説明し、対処方法の指導を願っています。突然の騒動に翻弄される様子がこの『御用留』によく書かれています。

茂原市文化財審議会委員

菅根 幸裕

問合せ

生涯学習課（9階）

TEL 2015559 FAX 2016007

文芸コーナー

米寿祝いへの償い

篠田 基行

市から米寿への祝いを受ける手厚いもてなしにただ感謝生活民として感涙にむせぶ応える生き方をしてきたのか自問自答をくりかえす

市民として名を汚がしたこと恥も思い当たらないでも受けるだけの意味を考える

市当局への返礼は何か心の在り方を思索した思い浮かぶのは青春譜だ甘く酸っぱい甘露の味だよば爺ながら残余の糧にと

それが日本武道御三家の一人松前重義博士の青春譜だモスクワ大学運動部長室に「青春を生きよう 米寿」と墨痕自筆の額に目を奪われたこれぞ生きる心の持ち方だとマッカーサーは座右の銘にウルマンの詩「青春」を掲示

笑顔を中心に気持ちにゆとりをメモランダムに「青春」覚書清冽な勢気いっぱいに深呼吸

◎選評 斎藤 正敏

市から米寿への祝いを受ける。応える生き方をしてきたのか自問自答する。思い浮かぶのは自身に課した青春譜だ。生きる心の持ち方。いくつになっても大切ですね。

- 偶数月は「短歌・俳句・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。
- 投稿は楷書でお願いします。作品・氏名（ふりがな）・電話番号を明記してください。

※詩の原稿送付先（直接送者）へ 〒297-0032 茂原市東茂原7-55 斎藤 正敏 宛。
詩は随時募集しており、どなたでも応募可能です。たくさんのご応募お待ちしております。
「広報もばらの詩」と朱書きしてください。原稿は30行以内でお願いします。

